

春

もう桜を見ることはしないと決めていた
華やかな春がやって来ても
渡り鳥たちが冬を避けるように
私は春から逃げ回ってきた

もう銀の笛を吹くことはできない
華やかで涼しげ音色に
優しい風が纏わりつくこともない
私は春に逢いたくなかった

何らの理由もなく
ただ、私は怯えている
媚を含んだような陽光の温もりを
唇の向こうにある底知れぬ快樂のごとくに

無数に伸び出た茶色い土筆に取り囲まれ
とめどなく流れる涙は
喜悦なのか、恐怖なのかさえ
私には理解不能だ

ああ、「私」とは何者なのか
それを確かめるために何をしてきたか
この身体に刻まれた刻印と
離れることのない、おぞましい記憶の数々

融解していくような不思議なおぞましさと
己のものではない、快樂の慄え
混じり合う、ということへの吐き気と
けだるさを伴った、単色の幸福感

あたたかな黒い土に触れると感^じることができ^る
この掌が行ってきたことを
不可逆な生を、そして
木々たちの芽が自動勃起してゆく気配を

白に近い青色の空が微かに流れている
じっと動かぬ細糸のような雲は、どこかよそよそしい
この季節が「始まり」のときではなく
「惜別」のときである、と告げている

抗い難い力が私を包み始めている
熱にうなされたような得体の知れぬ者
うち捨てられた大地を監視しているカメラ
私はそれらを、ひとつひとつ破壊する

(2014.3.11)